

日本の S P レコード史

郡 修彦

A History of Japanese 78r.p.m. Records

Haruhiko KOHRI

The phonogram, developed by Edison in 1877 was tested in Japan the following year. Subsequently, the record became the prevalent means for recording and distributing all sorts of art and entertainment contents. Indeed, the appearance of the conventional flat disc in particular, which afforded easy mass-production, heralded the arrival of the SP record era.

The first disc recordings in Japan were made by visiting Western recording engineers in 1903. Then, following the rise of national production and stiff competition in the Taisho period (the early stages of the 20th century) , the development of the microphone gave rise to electronic recording, which caused a dramatic expansion in the potential of the SP record. Partnerships with foreign companies beginning in the early Showa period (in the 1920s) enabled local production of Western music records, thus forming the embryo for today's music industry. Thereafter, records became a mirror that reflected the trends of the times.

This document aims to provide an accurate and simple account of a sixty-year journey of Japanese SP discs and the society they recorded based on the latest experimental research.

1877 年にエジソンにより実用化された蓄音器は翌年には日本に於ても実験が行われ、やがて、様々な分野の芸術・娯楽を記録して販売するソフトウェアの役割をレコードが担う事になり、特に大量生産が容易な平円盤の登場で本格的な S P 盤の時代が始まる。日本では 1903 年の欧米諸国による出張録音が平円盤の最初で、次いで国産会社の登場、群雄割拠の大正期を経て、マイクロフォンの実用による電気録音は S P 盤の可能性を飛躍的に拡大せしめ、外国会社との提携による洋楽盤の国内生産体制の整備により、今日の音楽産業の原形が確立されたのが昭和初期である。以後、レコードは世相を映す鏡として時代と共に歩み続けたが、本稿は日本の S P 盤の 60 年と世相の推移を最新の実証研究の成果に基づき平易且つ正確に述べたものである。

【はじめに】

音を記録する事は人類長年の願望であったが、写真が可視映像の固定に対し不可視の音を如何にして捉え記録するかの模索に長い時間が費やされた。1877 年（明治 10 年）にア

アメリカのエジソンにより発明された「フォノグラフ」が実用蓄音器の最初であり、これはメガフォン状の喇叭が録音用の集音装置と再生用の拡大装置を兼ね、集められた音は根本の振動板にて振動に変換されて録音・再生兼用の針に伝達され、記録用の蠟管（シリンダー）に刻まれる方式であった。エジソンはこの装置を速記の記録用として発明しており、様々な分野の芸術・娯楽を記録したソフトウェアの再生装置としては全く考えておらず、音楽・芸能は全て生の舞台・演奏会へ赴いて鑑賞するもので、缶詰音楽・芸術を個人的に随時再生するとの発想は当時はなかった。

日本では翌年の 1878 年（明治 11 年）に早くも「フォノグラフ」が紹介され、ユーイングなる人物の東京大学にての実験が最初であり、この際の装置は長年行方不明であったが戦後に発見され保存されている。1879 年（明治 12 年）からはユーイングが「フォノグラフ」の公開実験・講演を行い紹介と普及に貢献、アメリカではハードウェアの蓄音器が量産され、シリンダーのソフトウェアが販売される事により、缶詰音楽・芸術を個人的に随時鑑賞する形態が確立され、日本でも輸入による普及が始まった。シリンダーの複製技術の進歩や耐久性の向上に関する不断の研究は商品としての完成度を高め普及に拍車を掛けた。また、同時にシリンダーの音をゴム管を通して廉価にて一般大衆に聴かせる商売も、蓄音器とレコードの周知と普及の一翼を担っている。

音を振動に変換して針で刻む方式には「縦振動」と「横振動」の二種類があり、記録媒体には円筒状のシリンダーと平円盤のディスクがある。エジソンは「縦振動」のシリンダー、後発のベルリーナは「横振動」のディスクで一般にレコードと総称されている。「縦振動」は溝の幅が一定ながら強弱により深さが上下し、「横振動」は溝の深さが一定で強弱により左右に振れるもので、音質面では変換効率に優れた「縦振動」に軍配が上がり、量産性では「横振動」が優れている。エジソンは音質を最優先させた為に当初は「横振動」を考案しながらも「縦振動」を採用し、シリンダーから平円盤への業界全体の移行後も一貫していたが、量産性・携帯性・耐久性の点から 20 世紀のソフトウェアの形態は「横振動」のディスクが主流となった。

【出張録音】

録音・量産が容易なディスクの登場により缶詰音楽・芸術が商売として成立すると、欧米の先進諸国では内容の充実と拡大に努め、海外での出張録音を行うようになった。その結果、日本では 1903 年（明治 36 年）2 月のイギリスを最初に、アメリカ・ドイツ・フランスの各国が来日して録音を行い、当時の貴重な記録を多数残した。これらは、録音後に本国へ原盤を送りレコードの製造を行い完成品を日本に輸出するもので、日本で最初に発売された出張録音レコードは 1903 年（明治 36 年）11 月のアメリカ製であった。これはイギリスとの距離的な事情により、録音では後塵を拝したアメリカが商品では一番乗りを果たした訳である。以後は「横振動」の平円盤ディスク再生用の蓄音器の輸入も盛んに行われ普及が始まり、「縦振動」のシリンダーは急速に廃れた。なお、上記の日本での出張録音中、フランスの「パテ」社のみ「縦振動」のディスクであり、過渡期の形態を示している。

【国産始まる】

出張録音レコードは好評を博したが如何せん高額で、同時に殖産興業の明治の気運の中

では国産品を望む声が高まり、門外不出の録音技術やレコード製造技術も進取の気鋭に富む日本人の連綿不断的努力により欧米と同等の商品が可能の段階迄に到達し、1909年（明治42年）には国産の平円盤レコードが発売された。但し舶来品の信奉者を考慮して体裁は欧米品と類似している点は世相を反映していると言えよう。以後、各社の参入により国産品が市場の主流となり、出張録音自体が衰退して行った。

【複写盤の登場】

欧米列強に伍するべく近代国家としての体裁を整えつつあった明治政府には、急速な近代化を完全に咀嚼し得ていない事例が散見され、レコードに於ける著作権も顕著な例であった。ドイツの「ライロフォン」社が莫大な報酬によりレコード化を独占した桃中軒雲右衛門は、その人気から複写盤が多数製造されて廉価にて販売された為に法的訴訟へと発展したが、如何せん法的な規制が無い為に野放し状態であり、大審院は著作権を認めず複写盤を不問に付す判決を下した為にレコード産業は苦境に陥る。

【国産両面盤レコードの登場】

明治天皇崩御による歌舞音曲の自粛により大正時代は幕を開け、複写盤の横行により大手会社は等しく打撃を受けていたが、1913年（大正2年）に平円盤の片面にのみ音溝のある片面盤から、両面に音溝を有する両面盤が登場して実質上の値下げが行われ、新時代のソフトウェアの形態が確立し、以後片面盤は急速に姿を消した。ちなみに、出張録音各社の中でドイツの「ライロフォン」のみは最初から両面盤で、途中から両面盤に変更した会社もある。

【著作権法改正】

一部の心有る者の挺身が奏功し、遂に1920年（大正9年）には著作権法が改正されて複写盤は違法となり、8年に及ぶ業界の低迷に終止符が打たれた。これは利益最優先よりも文明国としての文化水準の向上を目指した真の近代化であり、大正デモクラシーの成果のひとつとして特筆に値し、その後長くレコード産業を保護し得たのである。

【関東大震災】

著作権法の改正により業績が好転したレコード業界は、関東大震災により東京の各社に大小の被害が生じ一時的な停滞を余儀なくされた。この時の被害状況により業界の再編成が行われ、離合集散や新規参入が見られたのが大正後期のレコード業界である。

【輸入税強化】

関東大震災の財政建て直しの為に浜口内閣は1924年（大正13年）に奢侈品には10割の輸入税を課し、蓄音器と輸入レコード（洋楽盤）は大幅に値上げとなった。これにより復興途上の業界は打撃を受けたが、この解決策として完成品を輸入するのではなく欧米と提携して国内生産を行う方式が考え出された。この新時代の形態により欧米を始め世界中の音楽・芸術が容易且つ廉価にて入手可能になり、普及と顧客層の拡大に大いに寄与した。

【ラジオ放送開始】

欧米で開始されたラジオ放送が日本で始まったのは 1925 年（大正 14 年）の事で、廉価にて容易に長時間音楽鑑賞が可能な事から、レコードの売上不振になるとの当初の心配も杞憂に終わり、逆に宣伝媒体としてレコード産業の味方となり、以後は共存共栄の道を歩み始めた。これは、レコードを使用したラジオ放送は行うが、生放送を録音してレコード化はしない等との細かい配慮によるもので、欧米では様々な事例があり一様ではない。

【マイクロフォンによる電気録音の開始】

従来のメガフォン状の集音喇叭を使用する録音方式に対し、電話機の原理を応用したマイクロフォンに真空管を使用した増幅器を組み合わせてレコードの録音を行う電気録音は格段の忠実性を誇り、これにより音質が向上し録音可能な音の範囲が飛躍的に拡大されてレコード産業は大きく発展した。また、従来の録音方法では録音時に録音されている音の確認は不可能であったが、電気録音ではマイクロフォンを経て増幅器で増幅されカッターヘッドに到達する音を同時にスピーカーにて確認可能な為に、失敗が減少し効率が向上した点も重要である。日本では 1927 年（昭和 2 年）に電気録音が開始され、名古屋の放送局の器材を使用したツルレコードが最初であった。

【外資・提携による大手会社の誕生】

輸入税強化により完成品の洋楽レコードを販売する従来の方式は大打撃を受け、その解決策として考案されたのが日本でレコードを製造する方法である。これは外国資本が日本の会社と提携する方式と日本支店を開設する方式があり、1927 年（昭和 2 年）にポリドール（ドイツ・グラモフォン）、コロムビア、ビクターの世界大手の商品を日本で製造販売する体制が整えられ、日本製の洋楽レコードが登場した。同時にマイクロフォン使用による国内録音の邦楽レコードも登場し、1920 年代の前半と後半ではレコード産業は大きく様相を変えたのである。以後、新形態の業界に中小会社の参入も多く、1930 年代は大小の各社が毎月膨大な数の新譜レコードを競って発売する状況が続いた。

【検閲開始】

出版物の検閲に対してレコードは野放し状態であったが、風紀上好ましからざる品や政治思想上問題のある品を取締まる目的で 1934 年（昭和 9 年）に出版法が改正され、以後は内務省によるレコードの検閲が開始された。これにより事前に新譜作品は全て検閲を受ける事となったが、レコード会社も法に抵触する作品を積極的に生産した訳では無く、むしろ抵触を避けて制作した為に、出版物程多くは該当作品が無いのが実態である。即ち国家により言論統制・思想統制が些か強化されたものの、社会秩序保持上の視点からであり弾圧や抑圧ではない点を踏まえる必要がある。

【新形態の洋楽盤】

外国会社との提携による洋楽盤は新時代のインテリ層を中心に好評を博し、クラシックのみならず、ジャズ・タンゴ・シャンソン等の軽音楽も毎月膨大な数の新譜が発売され、欧米諸国は日本を重要な提携先として捉える様になった。その中で、日本側が企画して制

作費用の一切を負担して提携先の欧米会社が録音を行うクラシックレコードが出現したのが 1934 年（昭和 9 年）の事である。外国から与えられる音楽では満足出来ず、自らの企画を外国に依頼する迄に音楽への要求水準が向上した点は、文化の咀嚼が進んだ事を示す好例であろう。

【戦時体制】

1937 年（昭和 12 年）7 月に中華民国との間に「支那事変」が勃発し、レコード産業も時代の波に翻弄される様になる。8 月には特別税法による 1 割の値上げが実施され、以後は物品税の引き上げにより 2 割・5 割・8 割・最終的には 12 割の状況で終戦を迎えた。国際情勢の不安による外国資本の引上げによる再編成が行われ、業界の低迷を払拭するべく政府が振興を目的に制定した「愛国行進曲」に端を発する数多くの官製・新聞雑誌業界主導の制定歌は時代と適合して何れも好評で、業界の苦境を救い新形態の指針となった事も忘れてはならない。

やがて、事変の長期化で物資不足が始まり、レコード業界も主材料である天然樹脂のシェラックが不足となり、代用材料や再生材料が使用された為に品質が低下し、特に 1939 年（昭和 14 年）から 1941 年（昭和 16 年）の間が極端であった。また、1939 年（昭和 14 年）の欧州大戦勃発により一部の国との提携が不可能となったが、最終的には 1941 年（昭和 16 年）後半の国際情勢緊迫迄は商業上の取り引きが続けられた事は余り知られていない。そして、1940 年（昭和 15 年）には政府による公定価格が制定されて国家による管理が強化され、1941 年（昭和 16 年）末には米英諸国との間に「大東亜戦争」が勃発し完全な戦時体制に突入すると、各社は新譜点数の削減と継続販売商品の大規模な縮小を段階的に図り、政府は合併による業界再編成を目指すも各社の反対により失敗に終わった。同時期に横文字や片仮名を自粛した社名や商品名を各社が採用し、レコードは一時的に「音盤」と呼称される様になった。1944 年（昭和 19 年）には毎月の新譜発売が困難になり隔月や随時の発売に変わり、1945 年（昭和 20 年）初頭を以て各社は新譜発売を中止、以後は空襲により各社が大小の被害を被り終戦を迎えた。

【戦後】

各社は終戦と同時に再開に向けての道を模索し、代表作品の再生産を中心に新時代向けの流行歌の制作にも力を入れ、新人歌手の募集も行われて業界を挙げて復興への道を邁進したが、戦災被害の程度は会社の復興を左右し、原料・燃料不足による生産量の低下は需要を満たすには程遠い状態であった。特に 1947 年（昭和 22 年）は物資不足が著しくレコードの盤質は最劣悪であったが、新譜の点数は増加を辿り占領下に於て諸外国との提携の再開も始まり、大東亜戦争の勃発により途絶えていた洋楽音源も新着が見られ、購入者の渴望を癒し好評を博した。

【磁気テープと合成樹脂盤の出現】

1930 年代後半にドイツで実用化された磁気テープは、戦後のアメリカで改良が重ねられ日本にも輸入されて放送局・レコード会社で順次使用され始めた。一筆書き方式のワックス原盤へのダイレクトカッティングに比して、失敗時には容易に消去出来るので無駄が無

く、録音後直ちに再生出来るので内容の確認が容易であり、周波数特性が良好である点が優れており、1953 年迄に各社は全面的に磁気テープ録音に移行した。当初は磁気テープに録音後にワックス原盤へ音を移して消去し再使用する補助的な役割であった為に、この時期の作品の中にはマスターテープが存在しない場合もある。

合成樹脂を使用し微小の音溝を宝石針で再生するレコードは戦後のアメリカで実用化され、33 回転のLP 盤と 45 回転のEP 盤が出現し、日本では 1954 年（昭和 29 年）にEP 盤が登場してSP 盤の役割を引き継ぐ新時代のソフトウエアとして急速に普及した。小型・軽量・堅牢・周波数特性良好・雑音微小の利点に加え、録音機材の日進月歩の向上により高忠実度の録音が可能になり、記録媒体の磁気テープの改良も進み、1950 年代の始めと終りではレコード自体も、録音形態も大きく変化したのである。

【SP レコードの終焉】

EP 盤の登場後も日本では 1962 年（昭和 37 年）迄SP 盤の新譜が発売されたが、それは天然樹脂による盤では無く合成樹脂で作られた、回転数が 78 回転で音溝が従来と同規模な以外はEP 盤と同様で、蓄音器と鉄針による再生は不可能なレコードであった。この時期のSP 盤はハードウエアの切替時期の暫定的な補助商品であり、1964 年（昭和 39 年）には販売終了となり各社のカタログから消え、日本に於けるSP レコードの歴史は終焉を迎えた。